

門弟弐

映画文学人生論

0461) 無名作家の日記	菊池寛	友と友の間
0471) 受験生の手記	久米正雄	破船
0481) 法城を護る人々	松岡譲	憂鬱な愛人
0491) 銀の匙	中勘助	
0501) 明暗	野上彌生子	

自分と懸け離れてゐる癖に自分とぴたりと合ったやうな親しい嬉しい感じですよ

夏目漱石の『それから』や『こころ』の登場人物のような不可解な行動を実行して世間をおどろかせた門弟たちの作品を読んでみた。

無名作家の日記	菊池寛	(友と友の間)
受験生の手記	久米正雄	(破船)
法城を護る人々	松岡譲	(憂鬱な愛人)
銀の匙	中勘助	
明暗	野上彌生子	

中勘助は一高、東大で野上弥一郎の同級生で、ともに漱石の講義を受けた。野上彌生子の初恋の人で、彌生子が中勘助と知り合ったのは弥一郎と結婚した後だといわれているが、人妻の「初恋」とは如何なるものか？俗物には理解できない。

勘助は嫂の末子をはじめ、同級生だった江木定男の妻万世（鏑木清方の「築地明石町」のモデルだという美人）やその娘妙子の思慕の対象だったともいわれているが、五十七歳になるまで誰とも結婚しなかった。

『それから』の代助のような男だが、兄や友人の妻を奪ったりはせず、プラトニックラブに徹した。そんな中勘助が書いた『銀の匙』について、漱石は次のように評している。

「普通の小説としては事件がないから俗物は褒



門弟式——映画文学人生論

めないかもしれませんが。私は大変好きですことに病後だから又所謂小説といふ悪どいものに食傷してゐる所だから甚だ心持の悪い感じがしました。自分と懸け離れてゐる癖に自分とぴたりと合ったやうな親しい嬉しい感じですよ」。

(大正二年十月二十七日付)

久米正雄と松岡譲は、漱石の死後、長女筆子の愛をめぐって、『こころ』の先生とKの役割を演じた。久米正雄が先生、松岡譲がKの立場だが、『こころ』とは逆にKのほうがお嬢さんと結婚している。

絶交したが、二人とも自殺はしない。久米は失恋の経験をいかした小説が売れて、流行作家になり、松岡は筆子の愛にめぐまれ、地味ながら自分のペースを守って作家生活を続けた。戦争をはさんで、昭和二十一年に和解が成立し、翌年、京都大丸で書画展を共催して、めでたしめでたし。

なお、失恋の経緯を久米が自ら書いたモデル小説の題名は『破船』、それに対抗して松岡が書いたのが『憂鬱な愛人』、共通の友人の立場から菊池寛が客観的に書いたのが『友と友の間』。当時は『破船』事件として話題になっており、『こころ』と関連させて読むと面白いが、現在はいずれも絶版で、古本の入手は難しい。

別るるや夢一筋の天の川 夏目漱石